

介護福祉士資格取得一元化に向けた、教育視点のあり方(3)

－国家試験対策の取り組みと課題－

荒 木 隆 俊	専攻科福祉専攻
宮 地 康 子	専攻科福祉専攻
松 田 水 月	専攻科福祉専攻
伊 藤 和 雄	専攻科福祉専攻

(2018年10月1日受理)

〔 要 約 〕

昨年度から、介護福祉士養成校卒業生に対しても、介護福祉士国家試験が義務付けられた。

筆者らは、先行研究(註1・2)において介護福祉士国家試験対策の経過から課題を抽出しながら受験指導に活かしている。

そこで、本稿は、本学における介護福祉士国家試験対策について、これまでの取り組み(昨年度後期分)を整理し、介護福祉士国家試験に取り組んだ経過から、昨年度1年間を通じた受験対策の成果と課題を探ったものである。

I はじめに

昨年度から、介護福祉士養成校卒業生にも国家試験が義務付けられ実施された。

しかし、近年の介護福祉士養成校を取り巻く状況も大きく変わり、学生確保といった点では大きな課題となっている。

本学においても同様の状況が伺え、このような深刻な事態の中で、入学してくる学生の基礎学力といった点でも問題を抱えている中、昨年度の介護福祉士国家試験(以下「国家試験」と略)の結果については、全体の合格率は70.8%、合格者の内訳に対して、介護福祉士養成施設受験者の合格率は88.0%であり、介護福祉士国家試験受験者全体における養成校の合格者としての割合は8.6%であった。

本学では、28名受験し26名(92.9%)の合格であった。

この本学での結果については、筆者らは重く受け止めており、昨年度国家試験対策の取り組みの再検討を行い、今年度の国家試験に向けて取り組んでいるところである。

本学の1年課程の学生は、保育士養成施設等を卒業し保育士資格取得者を対象とする養成課程である。これは、保育士養成課程において、社会福祉、心理、発達及び障害などについて一定程度履修していることを前提として成り立っている。筆者らは、幼児期から高齢者までをトータルにサポートできる福祉の専門職者

を養成するという使命を担えるよう授業を組み立てている。

また、養成校卒業生にも国家試験が義務付けられたことは、1年間という限られた短期養成期間の中で、保育士養成課程の履修科目の知識や保育実習の経験が、実際、どのような教育的効果をあげて実践に結びついた学習になっていたのかについても真価が問われてくる。そこで、「生きるとは」、「人の一生とは」といったことを考える場であり、子どもであれ、障害者であれ、高齢者であれ、「対象者の表情を読み取って仕事のできる専門職者」を目指し、援助を通して関わり合う方々の「人生経験や思いに近づく人としての共感能力」を高めていく力を身に付けさせたいと意識している。

このようなことから、養成校卒業生にも国家試験が義務付けられた以上、一定の「基礎学力」は必須となるため、これまでも重要視してきた学習を通して介護とは何かを理解・再認識し、基礎的な実践能力を習得する場を大事にして介護福祉士国家試験対策(以下、「受験対策」と略)へ結び付けている。

また、この過程の中で「基礎学力」といったものへの学生自らの「気づき」を学習成果へと結び付けていく期待も大きい。

II 受験対策実施経過（後期）と考察

1. 経過

後期授業の始まりにあたり、7月に実施した中央法規出版社の模擬試験結果について、個人面談を実施した。

面接の目的は、(1) 個々の学生の学習方法の確認 (2) 到達目標と、国家試験に向かう意識を高めることの2点を主たる目的として実施した。

また、この時点で個々の学生の到達数値目標を設定し、第2回目の模擬試験までの到達目安を伝え、次の点を新たに加えた対策を講じた。

① グループ学習

第1回模擬試験や前期試験の成績等から、グループ内の学力が偏ることのないように成績上位者をグループに配置すること、学習意欲が高くリーダーシップに長けている学生をリーダーとしてグループ編成を行い、学習時間は、放課後や授業の空き時間に実施するよう働きかけた。

これは、個人的な学習に加えて、授業後から帰宅までの空き時間を有効に活用したグループ学習を実施することで、学習意欲がみられない学生や学習習慣が身につけていない学生に対しては意欲の向上を期待した。

また、学生間の競争意識を高め、得点アップに繋がることも期待でき、同じ目標に向かい、他者と関わりながら学んでいく過程で、これまで学んできた知識等を整理しながら、学びを確実なものとする効果も相互に期待できると考えたからである。

さらに国家試験に合格するという目標に向かって努力する過程において、一人では壁にぶつかり、悩むこともあるだろう。われわれ教員には言えないことも、同じ立場である学生同士であれば共感でき、自分だけが辛いのではないということを理解し、互いに支え合いながら受験までの道のりをともに歩み、チームで同じ目標に進んでいく過程を体験的に感じ取って欲しいと考えたからである。

このようにグループ学習に様々な目標をもって進めていった背景には、筆者らの先行研究で述べた「クラス運営」の視点においても、グループ学習による支え合いの学習は、受験までクラス全体の士気を高めながら、同じ目標に向かい主体性をもって学ぶことのできる効果的な学習方法だと推測していた。

② 難易度の高い問題への挑戦

10月～11月は国家試験に向けての重要期間と伝え、第1回模擬試験結果を基に、正解率の低かった科目「社会の理解、介護の基本、介護過程、発達と老化の理解、認知症の理解、障害の理解、こころとか

らだのしくみ」を中心に難易度の高い問題（5者択一）を課題として配布した。

問題数は18～48問と科目によって異なるものを配布。提出期限を設け自宅学習にて問題を解き、授業の中で解答を伝え自己採点する。解答用紙を一度回収しコメントを付けて返却した。

また、間違った問題や曖昧に解答した問題を中心に、語句の意味や間違えた問題、迷った問題についても、教科書や参考書等で調べ、その内容をノートに整理し、毎週末提出するといったことを集中的に実施した。

その時点では、学生にとっては難しい問題であったと思われたが、前期で培った基礎をもとに、自分の力試しができ、より知識が深まることを実感できている様子も伺え、学生には徐々にではあるが意欲や問題を解き正解していく過程において真剣さが伝わる雰囲気表れている。

また、提出期限を決めることで、集中して取り組むことができ学習意欲の向上にもつながったと考え、教員が確認することで、学生一人ひとりの学習の進行度や理解度、学習方法が把握できた。

この過程では、学生との関わりを通して、学習を苦手とする学生も多いと感じる中で、苦手意識が先行して学習に取り組むまで時間を費やす学生もいたが、難易度の高い問題への挑戦を通して、確実に正解できる力が身に付く実感が自信に繋がり、自ら意欲をもって課題に取り組む姿へと変化がみられたのではないかと推測している。

学習の面白さを気付く時期が早ければ、早いほど学習成果がみえ、国家試験の合格へと繋げることができるのではないかと推測している。しかし、そのことに気付く時期には個人差があり、1年課程である本学においては国家試験直前となれば間に合わなくなることも考えられる。

このような経過の中、12月下旬に第2回の模擬試験を実施した。

結果は、次のとおりである。

2. 考察

① 前期を中心的に学ぶ本学開講科目「人間の尊厳と自立、人間関係とコミュニケーション、生活支援技術、発達と老化の理解」については、第1回の模擬試験の結果と比較すると、平均得点率の低下がみられている。まだ確実に理解していたとは言い難い結果であると推測できる。

特に内容が重複するような問題について学習する際には、他科目との関連性も意識し、繰り返し学習

平成29年度介護福祉士全国統一模試試験 第2回 平均得点率 (表1)

得点率 順位	グループ	科目名	得点率 (%)
1	3G: ころとからだのしくみ	認知症の理解	84.0 (↑)
2	2G: 介護	コミュニケーション技術	83.8 (↑)
3	1G: 人間と社会	人間関係とコミュニケーション	80.0 (↓)
	4G: 医療的ケア	医療的ケア	80.0 (↑)
4	3G: ころとからだのしくみ	ころとからだのしくみ	75.8 (↑)
	5G: 総合問題	総合問題	75.8 (↑)
5	1G: 人間と社会	人間の尊厳と自立	75.0 (↓)
6	2G: 介護	介護過程	72.5 (↑)
7	2G: 介護	生活支援技術	68.8 (↓)
	3G: ころとからだのしくみ	発達と老化の理解	68.8 (↓)
8	2G: 介護	介護の基本	69.0 (↑)
9	3G: ころとからだのしくみ	障害の理解	55.0 (↑)
10	1G: 人間と社会	社会の理解	53.3 (↑)
※表中、グループ 1G~4G標記は、カリキュラム「領域」 1Gは「人間と社会」 2Gは「介護」 3Gは「ころとからだのしくみ」 4Gは「医療的ケア」を意味する。 ※表中、得点率 (↑・↓)標記は、1回目の模擬試験との比較で、科目ごとの得点の変動を意味する。			

をすることで全体的な学びにしていくことが合格の
一歩となると考えている。

- ② 第1回模擬試験に比べ、平均得点率が上昇した科目は13科目中、9科目で全体の7割程度の科目の得点率が上昇している。

これは、第1回の模擬試験結果について教員による個人面談を実施し、苦手科目を意識させ重点的に学習をした結果、苦手科目の得点が増えるという成果に結びついた学生も多かったと推測され、教員の学生全体への働きかけだけではなく、学生一人ひとりに目を向けた関わりをもつことが、学生の心理的サポートに繋がったと考えている。

- ③ 第1回模擬試験と比較し得点が増えた学生は19名(67%)に対し、逆に低下した学生は6名(21%)、変化がなかった学生は3名(14%)であった。

具体的には、20点以上の得点上昇が2名、19~10点の得点上昇が7名、9~1点の得点上昇が10名。逆に、1~10点得点低下が5名、10点以上低下が1名であった。

上昇率の低い学生については、第1回模擬試験の結果がある程度、合格基準に達してその点数に満足、安心し、その後の学習意欲に甘さが生じていたように思われる学生もいた。そのため学習にも力が入らず、低下した結果になったと考えられる。

また、点数の上昇に結びつかない学生の中には、

学習を進めていく段階で、知識が増えることにより、解答に迷いが生じてしまう場合も出てくる可能性があるのではないだろうか。

以上のことから、1年間の養成課程で国家試験が義務付けられたことは、やはり、カリキュラム間の進捗にも影響を与えかねない状況があり、前後期のカリキュラム配置や実習の時期等にも影響を与えかねない状況にある。

前期で実施していたような、漫然と問題をこなす提出し終わりとするのではなく、問題に触れてみてどうだったのか、それを踏まえて今後どのように学習をしていく必要があるかについて、学生自身が気づき、自らの学習行動に移すというようなフィードバック効果のできるだけ早い時期に変えていく必要があった。

つまり、受動的な学習から自己学習する方向へと導き、学生一人ひとりが継続的に学習し能動的な学習へと意識を変えていく取り組みも大きな鍵を握ることになる。そのためには、クラス全体が同じ目標を持ち、同じ方向に向かわせる体制、雰囲気作りといったものも早い段階で作るべきだったと反省している。

そこで、受験対策として取り組んだ1年間を通して、以下の方向性が見えてきた。

1) 段階的、継続的な学習計画の作成

入学時から国家試験まで、段階的、継続的に学習が進んでいくような計画を作成し、教員の役割

分担を明確にし、受験対策が円滑に行えるような体制を整える必要がある。

2) 学生の主体的な取り組みの推進

学生の主体的な取り組みは、成功の要である。入学時から、学生の主体的な取り組みを引き出し、学習の進捗状況を把握しながら、目標達成までの支援を個別に行うようにする。

3) 教員の国家試験内容の熟知と授業力の向上

4) 実技や実習の経験を活かした学習の推進

5) 個別指導の充実

- ・学習習慣や受講態度が身につけていない学生には、入学時から基本的な姿勢について指導・助言を行う。

また、自己学習については、課題を提供し、解らないところは調べ学習をする習慣を身に付け、学生の個別状況に応じて継続的に支援していく必要がある。

- ・成績低位の学生への個別支援

入学する学生の2～3割の学生は、生活指導も含めて全体的な取り組みの中だけではついていけない学生も見受けられる。このような学生は、読み書き、問題の理解、知識の活用など基礎的学力が若干劣っていると感じられ全体の中で同一に学んで成長していくには厳しい状況にある。

そのような学生には、個別指導の時間をより多く設定し、より手厚く支援しながら、学生自らが達成感を得られるような支援を行っていく必要がある。

Ⅲ おわりに

昨年度の国家試験受験の直前には不安や緊張で情緒が不安定になる学生もみうけられた。また、受験会場においても大勢の受験者を見て不安や緊張を隠せない学生も多くいた。

しかし、本学専攻科学生全員が自らの意志で最後の時間まで諦めず机を離れなかった姿は大変誇らしく、これまで共に歩んだ仲間を励ますように寄り添って頑張っていたことが印象に残っている。

卒業後は社会の荒波にもまれながら必死に生き抜いていかなければならない。これまで苦楽をともにすれば、仲間の絆も深まり、卒業後の支えにもなってくれるだろう。

国家試験の学習において学んだことは、知識習得だけでなく、人との繋がりが希薄になっている現代において、他者に関心をもち、困っている様子があれば手を差し伸べること、認め合うことや、自分と異なるも

のの見方を受け入れること等、今後の学生の人生において大切なことばかりである。

これまでの本学の教育目標は、介護福祉士としての質の高い専門性と、社会人としての人間性を意識して養成してきた経緯がある。今後は、本学の教育目標を堅持しながら、専門性をより高めるツールとしても、この受験対策を充実させるというスタンスに立つべきである。

われわれ教員ができることは ①学生一人ひとりの主体性ある学習への取り組みをサポートすること ②個別に介入が必要な学生については早期に把握し、意欲的な学習へと繋げるよう意識的に関わりをもつこと ③教員間の連携をとり、多方面から学生を支援していくことにある。

試験を受けるのは学生自身であり、教員は陰で支える裏方の役割がある。

指導や関わりがすぐに結果として表れず、待たなければならないもどかしさもあるが、卒業後は将来に亘って自分で考えながら保育や介護という福祉の現場で活躍していく学生達であり、自分の足で歩いていく大切さを学んでほしいとの思いが深い。

昨年度から養成校に新たに課せられた『介護福祉士国家試験』には、介護福祉士の質の向上、専門性の向上という目的がある。それは、高齢社会において、さらに多様化した介護ニーズを考えると、的確に対応できる幅広い能力と決断力が求められる。

国家試験合格を自信に、観察能力やコミュニケーション能力にさらに磨きがかかり一人ひとりの心身の状況に応じた支援を展開して欲しい。

様々な状況下にある他者を理解し、他者と一緒に歩むことのできる人間力も同時に身につけて欲しい思いがある。

専攻科での1年間は、じっくり自分を見つめ直すことができる1年間である。様々な課題にぶつかり、自分の弱さや情けなさに嫌というほど向き合う事になるだろう。その弱さや壁にぶつかった時に悩み、考え、他者の痛みや苦しみも理解できる専門職者へと成長できるチャンスではないだろうか。

国家試験という目標に向かう過程には、学生がこれから生きていくための人間力を育むことのきっかけが多く転がっている。

国家試験合格の先には、頑張り抜くことができたという誇りと自信を財産に、社会や他者を広く捉え、支えるために必要な豊かな心を持つ大人の姿へ成長していることを願っている。

註

- 註1 荒木隆俊 「介護福祉士資格取得一元化に向けた、教育視点のあり方 (1) 羽陽学園短期大学紀要第10巻 第3号 2017 p29-38
- 註2 荒木隆俊 宮地康子 松田水月 伊藤和雄

「介護福祉士資格取得一元化に向けた、教育視点のあり方 (2) - 国家試験対策の取り組みと課題 -」 羽陽学園短期大学紀要第10巻 第4号 2018 p107-113

SUMMARY

Takatoshi ARAKI,
Yasuko MIYACHI,
Mizuki MATSUDA,
Kazuo ITO:

Care Workers Qualification Acquisition Unification (3) - Match of a State Examination Measure and Problem -

From last year, a care worker national examination was required for the care worker training school graduate.

The writers make use in examination instruction while extracting a problem from the progress of care worker national examination measures in a precedent study (note 1.2).

Therefore, about care worker national examination measures in this school, I arranged a past action (for last part of last year), and this report investigated result and the problem of examination measures through one year in last year from the progress when I worked on a care worker national examination.

(Uyo Gakuen College)

